

過疎地域における集落再生のカギはUターンなのだろうか

19H2005 阿部 真吾

1 はじめに

本研究では、過疎地域において修正大家族が形成されているか、子育て後Uターン¹のサイクルが形成されているか、また、限界集落になっていないか、ということについて問いを設定して、過疎地域でインタビュー調査を行い、明らかにする。

1-2 研究背景

個人的背景として、筆者の出身地である岩手県宮古市では少子高齢化が進行しており、小学校の統廃合、複式学級の増加などの話を耳にすることがあったため、過疎化や限界集落問題などに関心があった。

社会的背景として、総務省は2020年国勢調査の結果から全国1718市町村の51.5%にあたる885市町村を過疎地域に指定し、2022年度当初予算案に前年度比200億円増の5200億円を計上するとしている。

以上のことから、調査地は1995~2020年までの国勢調査の結果により、岩手県宮古市川井地域に決定した。

2 川井地域について

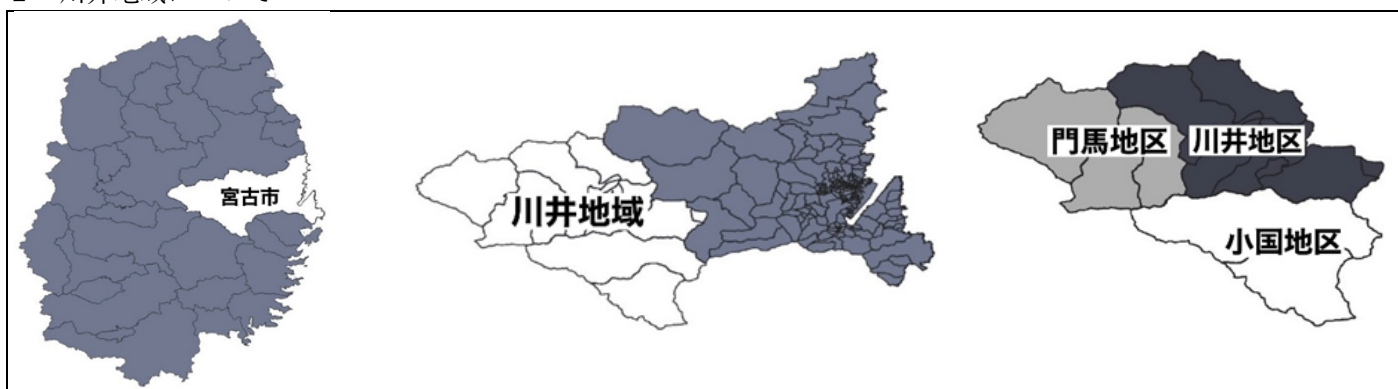


図1：川井地域の位置関係（筆者作成）

本研究では、図1のうち、中央の地図の白塗りの地域を川井地域、右の地図を川井地区、門馬地区、小国地区と呼ぶ。尚、それより小さい集落の場合は、「川井地区箱石」のように呼ぶ。

2-1 川井地域の人口

表1：2020年の人口と高齢化率
(国勢調査より筆者作成)

	総人口(人)	高齢化率(%)
宮古市	50,369	37.8
川井地域	2,059	54.7
川井地区川内	329	55.9
川井地区箱石	153	64.7
川井地区川井	662	53.5
小国地区江繫	290	58.3
小国地区小国	351	54.1
門馬地区	274	47.8

2020年時点で宮古市全体の高齢化率が37.8%となっているのに対し、川井地域全体での高齢化率は54.7%となっている。門馬地区では47.8%とかなり低く50%に達していないが、川井地区箱石では64.7%と他の集落と比べて高くなっている(表1)。

集落別の人口推移についてコホート分析(本書では割愛する)を行ったところ、どの集落を見ても年々出生数は減少し、総人口においては時折増加する年も見られるが、基本的には減少している。また、15~19歳の人口は川井地域のいずれの地区でも減少または増減なしとなっており、進学や就職を機に転出していることが分かる。

しかし、2005~2010年の川井地区箱石、2010年~2015年の門馬地区の人口では、子育て後世代を含む人口の増加が見られること

から、子育て後Uターンのサイクルができていないのではないだろうか。

また、航空写真比較(本書では割愛する)から、家屋の減少は読み取れない。また、農地の大きな減少も見られない。航空写真からは、現在も農地が使われているか、農地は使っていないが手入れはしているか、手をつけていない荒れた土地になっているかは判別できないが、農地が大きく減ってしまっているということはないようだ。

2-2 川井地域の先行研究

川井地域の先行研究について、酒井・中村(2018)、国土庁(1995)の2つを取り上げるが、いずれも川井地域の第三セクターである、ウツティかわいと川井産業振興公社について言及している。この2社は、川井地域の雇用拡大、地域

¹ 子育て後にふるさとに帰還するというサイクル。

活性化の目的で設立され、川井地域の住民にとって第三セクターの存在は大きい。

3 問いの設定

以上のことを踏まえて、以下5つの問いを設定する。

① 川井地域でも修正拡大家族は形成されているのだろうか。																																				
② 表2は、コホート分析から子育て後世代の人口が増加している集落を抽出したもののだが、集落再生のカギであるUターン、特に子育て後Uターンのサイクルが川井地域できているのではないだろうか。	<table border="1"> <tr> <td></td> <td></td> <td>40~44</td> <td>45~49</td> <td>50~54</td> <td>55~59</td> <td>60~64</td> </tr> <tr> <td>川井地区箱石</td> <td>2005-2010</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>4</td> <td>2</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>川井地区箱石</td> <td>2010-2015</td> <td>12</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>3</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>小国地区小国</td> <td>2010-2015</td> <td>5</td> <td>1</td> <td>-1</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>門馬地区</td> <td>2010-2015</td> <td>16</td> <td>9</td> <td>11</td> <td>8</td> <td>7</td> </tr> </table>			40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	川井地区箱石	2005-2010	2	2	4	2	18	川井地区箱石	2010-2015	12	7	6	3	11	小国地区小国	2010-2015	5	1	-1	3	4	門馬地区	2010-2015	16	9	11	8	7
		40~44	45~49	50~54	55~59	60~64																														
川井地区箱石	2005-2010	2	2	4	2	18																														
川井地区箱石	2010-2015	12	7	6	3	11																														
小国地区小国	2010-2015	5	1	-1	3	4																														
門馬地区	2010-2015	16	9	11	8	7																														
③ 航空写真の比較から、通い農や定年帰農の可能性はあるのではないだろうか。	表2：子育て後世代の人口変動(国勢調査より筆者作成)																																			
④ 川井産業振興公社は紫蘇を加工した飲料のかわいペリーラや紫蘇原液などが主力商品だが、酒類の製造はしていない。新たな地域おこしの品として、川井産業振興公社でも酒類製造の可能性はあるのだろうか。																																				
⑤ 酒井・中村(2018)の研究では、川井産業振興公社について言及されているが、ウッティかわいについては言及されていない。ウッティかわいも地場産業を活かした地域づくりや若者の雇用機会の拡大につながっているのではないだろうか。																																				

3-1 調査対象者

調査対象者は次のとおりである。

表3：調査対象者一覧(筆者作成)

名前	職業	出身地区	現在の居住地	性別	年齢(調査当時)	調査場所	調査日時	調査方法
TKさん	宮古市川井総合事務所職員 (宮古市職員)	川井地区	川井地区	男性		宮古市川井総合事務所	①2022年8月9日 13:50~14:50 ②2022年11月21日 ③2022年11月24日	①非構造化インタビュー(対面) ②③構造化インタビュー(メール)
K.Yさん	宮古市門馬出張所所長 (宮古市職員)	門馬地区	門馬地区	男性		門馬地域振興センター	2022年8月17日 14:00~15:10	非構造化インタビュー(対面)
N.Hさん	川井地域づくり委員会会長 元郵便局員	川井地区	川井地区	男性	66歳	川井地域振興センター	2022年8月16日 14:00~14:50	非構造化インタビュー(対面)
Y.Kさん	箱石地域づくり委員会会長 元会社員	川井地区	川井地区	男性	71歳	箱石地域振興センター	2022年8月19日 10:00~11:00	非構造化インタビュー(対面)
Y.Hさん	小国地域づくり委員会会長 NPO法人小国振興舎理事 元公務員	小国地区	小国地区	男性	73歳	里の駅おぐに	2022年8月18日 9:50~10:50	非構造化インタビュー(対面)
S.Mさん	江繁地域づくり委員会会長 林業従事	小国地区	小国地区	男性	70歳	江繁地域振興センター	2022年8月18日 12:50~13:40	非構造化インタビュー(対面)
IKさん	門馬地域自治振興協議会会長 区界高原そば生産振興組合 元学校事務職員	門馬地区	門馬地区	男性	75歳	門馬地域振興センター	2022年8月17日 14:00~15:10	非構造化インタビュー(対面)
S.Tさん	去石部落会会長 プログラマー	門馬地区	門馬地区	男性	62歳	門馬地域振興センター	2022年8月17日 14:00~15:10	非構造化インタビュー(対面)
O.Yさん	専門学生	川井地区	川井地区	男性	21歳		2022年2月19日 13:00~14:00	非構造化インタビュー(zoom)
F.Jさん	元会社員	川井地区	川井地区	男性	21歳		2022年6月14日 22:00~22:50	非構造化インタビュー(LINE通話)
K.Sさん	会社員	川井地区	茨城県	男性	21歳		2022年6月22日 12:50~14:20	非構造化インタビュー(zoom)
O.Aさん	株式会社ウッティかわい 社員	川井地区	川井地区	男性	53歳		2022年10月12日 2022年10月21日 2022年10月25日	構造化インタビュー(メール)
FRさん	株式会社川井産業振興公社 社員	川井地区	門馬地区	女性	53歳		2022年10月18日 2022年10月22日 2022年10月26日	構造化インタビュー(メール)

4 調査結果と考察

4-1 修正拡大家族の形成

インタビュー調査の結果から、各会長においては他出子や兄弟が、川井地域の近隣都市の宮古市、盛岡市、遠野市のいずれかに居住していることが分かった。そして孫に会わせるために定期的に帰ってきたり、コロナ禍で保育園や幼稚園が休みにってしまった場合に、1週間ほど預かることもある、という声も聞かれた。また、田植えや収穫の時期など人手を必要とするときに、週末だけ手伝いに来るとい声も聞かれ、困ったときに互いに助け合う関係ができて

おり、修正大家族は形成されていると考える。

しかし、修正大家族が形成されているとはいえ、一緒に暮らしていないことに対して寂しさはあるという声も聞くことができた。そのような中でも、買い物ついでに孫に会いに行くという声もあった。また、近年は SNS での交流もあり、コロナ禍ではあっても、川井地域では定期的に他出子との交流があり、修正大家族は形成されていると考える。これが問い①への答えになるが、次からは他出子が将来的に U ターンをするという可能性について、問い②③への解釈と共に考えていく。

4-2 子育て後 U ターンと人口増加の要因

2010-2015 年の人口増加の要因は、トンネル工事関係者、復興道路工事関係者によるものだと、T.K さんへのインタビュー調査で明らかになった。しかし、2005-2010 年の人口増加の要因について、住民基本台帳では人口の増加が見られないため、この人口増加要因は不明である。

したがって、川井地域では問い②の子育て後 U ターンのサイクルは形成されていないことが分かった。また、今後の子育て後 U ターンの可能性について、全員一致で難しいとの回答が得られた。

4-3 就農の可能性

インタビューから、定年後の U ターンについては、どの集落でも数名いるが、新たに農業をするために U ターンをするというのは難しいというものであった。その要因は鳥獣被害である。特にシカやハクビシンの被害が甚大で、作れば食べられてしまう状態だという。したがって、問い③に関して、農業を目的に川井地域に U ターンすることは難しく、また通い農にしてもこれで生計を立てていくのは難しいと考える。しかし、休耕地も多くどうにかこれを活用できないだろうか。川井地域の特産品である紫蘇は鳥獣被害に遭わないという話を聞くことができた。農地バンクを活用して、休耕地で新たに紫蘇の生産、紫蘇加工品の新商品を開発していくことが必要であると考えられる。

4-4 第三セクター

ウツティかわいも川井産業振興公社と同様に、地場産業を活かした地域づくりや若者の雇用機会の拡大に貢献している企業であることが分かった。また、川井産業振興公社でも過去に酒類製造をした経験があり、もう一度地域おこしの品として、製造販売の可能性は十分にあると考える。

4-5 廃校の活用

ここまで問い①～⑤に関する考察をしてきたが、ここからは、インタビュー調査をしていく中で見えてきたことについて考えていきたい。

旧小国小学校は現在「里の駅おぐに」として道の駅的な活用がなされている。Y.H さんによれば、里の駅おぐにの企画から運営を始めるに至るまで、多くの時間を要したという。

宮古市と旧川井村が合併した 2010 年から、小国地区小国では市長と今後の地域のことについて話し合う場を設けた。まず自分たちの思いを市長にぶつけ、市長もそれに答える意見交換の場を設けたことで、これから自分たちは、地域は、どうしていけばいいのか、宮古市がどのような対応をしてくれるか、それらが明確になり、地域住民は自分たちの地域の将来に希望を持つことができた。その後は川井地域外の NPO を巻き込み、外部の視点から自分たちの地域を見つめ直した。これにより交流の鏡効果が現れ、自分たちが今まで気が付かなかった新たな知見を得ることができた。

小国地区小国では Y.H さんが先頭に立って行動を起こし、地域住民と目標を共有して、地域全体で地域の問題に向き合っている。その後、地域住民だけでなく行政や市長、市議会議員、教育委員会、NPO など様々な人を巻き込みながら、2019 年に開館し、現在の里の駅おぐにの運営に至っている。

また、教員住宅を移住定住支援の枠組みとして、小国地区小国の住民が運営している。これは田舎暮らしの体験や一時的な滞在拠点として使える田舎体験住宅である。実際に、大学院生が川の研究で滞在したり、シカのハンティングをする人たちが滞在するなど、ショートステイで活用されている。しかし、Y.H さんは「全部が全部定着するとは限らなくて、なかなかうまくいかない」と話し、ショートステイで人が来たからといって、その人が必ずしも定住するわけではないが、やればやっただけの成果が出てくる。逆に何もしなければ、最終的には限界集落になってしまう。I ターンの人口を少ないながらも、着実に増やしていくことが集落再生のカギなのではないだろうか。

S.M さんは、旧江繫小学校を墓地にする活用希望を話してくれたが、これについては割愛する。

4-6 家の跡取りよりも都会へ呼び寄せるという考え方

Y.K さん、S.M さん、O.Y さんから家の跡取りよりも都会へ呼び寄せるといふ考え方を聞くことができた。これは集落の過疎化を押し進めてしまう原因になることは確かだが、この流れへの抗いは難しいと考える。これからは山下(2012)

が集落再生のカギとしている U ターン層だけでなく、小国地区の事例のように I ターンを受け入れる環境を整えることが集落再生のカギになると考える。

5 まとめ

5-1 限界集落論と修正拡大家族論、双方からのアプローチ

山下(2012)や徳野(2014)が示すように過疎地域において、限界集落論ではなく修正拡大家族論的な考え方で、過疎問題に向きあっていくことは重要である。しかし、修正拡大家族論からのみの考え方でも不十分であり、過疎地域を限界集落論と修正拡大家族論、双方から向き合っていく必要があると考える。川井地域では修正拡大家族が形成されているから、これからも集落が元気でお年寄りたちは孤独ではないから大丈夫、という楽観的なことではない。現状、修正拡大家族が形成されていたとしても、限界集落になり得るということを理解しておく必要がある。

5-2 集落再生のカギ

ここで重要になると考えるのは、地域住民の当事者意識や行政への働きかけの先にある、I ターン層の取り込みであり、これによって未来は変わっていくのではないだろうか。修正拡大家族が形成されていても、川井地域に戻るつもりはない、将来的には出ていくつもりという声を聞くことができた。したがって、私はその集落出身でもなく、今まで関わりのなかった I ターン層を受け入れていける体制・環境をどれだけ作れるかが集落再生のカギになってくると考える。しかし、ただ待っているだけでは誰も来てはくれない。幸い川井地域には人の呼び込みに成功している小国地区小国の事例があるため、まずは川井地域全体でこれを共有していくことが必要だ。そして、地域住民が主体となり、全体で問題点、目標を共有して、行動を起こし、行政や NPO など様々な人を巻き込んでいく必要がある。

Y.H さんが「黙っていればいなくなるばかりだけど、何とかもがき苦しんでもアクションを起こしていれば、それなりの成果はある」と話すように、少ないながらも定住する人が来たり、ショートステイの人が来たり、この成功体験を小国地区小国のみ留めておくのではなく、川井地域全体で共有していくことが、これからの川井地域にとって必要である。これは決してすぐに結果が出てくるものではないが、小国地区小国のように少しずつでも I ターンを増やしていくことが、これからの川井地域の存続において重要であると考えられる。

参考文献

岩手県川井村(2009)『悠久の森を語り継ぐ 岩手県川井村 54 年の終章 2009』岩手県川井村

川井村郷土誌編集委員会(1962)『川井村郷土誌(上巻)』岩手県川井村役場

川井村郷土誌編集委員会(1962)『川井村郷土誌(下巻)』岩手県川井村役場

国土庁地方振興局(1995)『山村振興調査報告書 平成 6 年度 岩手県下閉伊郡川井村 -地域活性化支援調査-』国土庁地方振興局

酒井宣昭・中村淳一(2018)「宮古市川井における地場産品を活かした地域づくり」東北学院大学東北文化研究所編『東北学院大学東北文化研究所紀要』東北学院大学東北文化研究所、pp.65-74

山下祐介(2012)『限界集落の真実』ちくま新書

藤渕志保(2022)「過疎自治体 5 割超す 指定 885 市町村に人口減加速」『毎日新聞』2022 年 1 月 21 日朝刊 1 面

岩手県『農地中間管理事業の概要について』

<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/keiei/1007606.html>(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)

小田切徳美(2013)『地域づくりと地域サポート人材 -農山村における内発的発展論の具体化-』

https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/32/3/32_384/_pdf(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)

Google Maps

国土地理院地図(電子国土 Web)

政府統計の総合窓口(e-Stat)、国勢調査(総務省)、小地域集計

総務省地域力創造グループ過疎対策室(2022a)『令和 2 年度版 過疎対策の現況』

https://www.soumu.go.jp/main_content/000807031.pdf(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)

総務省地域力創造グループ過疎対策室(2022b)『令和 2 年国勢調査に基づく過疎地域の追加について』

https://www.soumu.go.jp/main_content/000803256.pdf(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)

徳野貞雄(2014)『T 型集落点検から見えてくる家族と集落のカタチ—社会的限界集落論批判、「家族」と「世帯」は違う—』http://www.jiid.or.jp/ardec/ardec50/ard50_key_note6.html(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)

宮古市『宮古市小国総合交流促進施設「里の駅おぐに」』

<https://www.city.miyako.iwate.jp/kawai-shisho/satonoekioguni.html>(最終閲覧日:2023 年 1 月 2 日)